

中国における崇仏と排仏
—なぜ、仏教は排斥されるのか—

木村 宣彰

(大谷大学名誉教授・前学長)

【ファシリテーター】 桂紹隆 (龍谷大学文学部教授)

【コメンテーター】 若原雄昭 (龍谷大学理工学部教授)

入澤 崇 (龍谷大学文学部教授)

佐藤智水 (龍谷大学文学部教授)

開催場所：龍谷大学大宮学舎本館講堂

開催日時：2011年1月13日(木) 17:00～18:30

参加人数：74人

司会： 皆さんこんにちは。時間になりましたので、只今より、大宮学舎の公開講演会を開催いたします。それではご一同様、合掌。南無阿弥陀仏……、礼拝。

初めに、主催者を代表いたしまして、宗教部長でアジア仏教文化研究センター長の桂よりご講師の紹介とご挨拶を申し上げます。

桂： 皆さん、お寒い中をお集まりいただきましてありがとうございます。龍谷大学の宗教部では毎年、大宮で2度公開講演会を開いていますが、今年は4月から発足しました、アジア仏教文化研究センターの講演会を兼ねまして、本日の講演会を開きました。本日は、大谷大学名誉教授、前学長でおられます木村宣彰先生から、「中国における崇仏と排仏—なぜ仏教は排斥されるのか—」というタイトルでご講演をいただきます。我々のアジア仏教文化研究センターでは、アジア諸地域における仏教の多様性とその現代的可能性を一つのメインテーマにしまして、現在のアジアを見回ししても様々な形の仏教がございますが、それがどのように発生して、それぞれの現代社会においてどんな役割を果し得るのかということを追究しております。とりあえず5年間のプロジェクトでございます。本日は特に大変刺激的なタイトルだと思います。中国において、仏教は時々廃仏されるわけですが、それがどういうふうにして、なぜ起ってきたのかということの木村先生から聞かせていただけたらと思います。皆さんも是非とも先生のご講義から多くの事を学んでいただきたいと思っております。

本日はどうもお集まりくださいましてありがとうございます。では、木村先生、よろしくお願いたします。

司会： それでは早速、ご案内のとおり、木村先生から「中国における崇仏と排仏—なぜ仏教は排斥されるのか—」と題しまして、ご講演をいただきます。

木村： 今ほど、桂紹隆先生からご紹介をいただいた木村でございます。どうぞよろしくお願いたします。人間、常に冷静であらねばならないのですけれども、昨年でしたか、桂先生からお電話をいただいた時は少し混乱をしておりますし、「この機会に、来て話をするように」と言われて、日頃からお世話になっておりますし、尊敬する先生だったものですから、つい、お引き受けをしてしまいました。「綸言汗の如し」というようなもので、一度言ったことは戻らないもので、今日こうして寄せていただきました。タイトルも少し大きな題で、困惑しておりますけれども、私に与えられた時間の中でお話をさせていただき、且つ、ご教授を賜ればと思っております。

先ず、こういうタイトルになったのには訳があります。昨年から少し時間の自由が利くようになったものですから、いろいろ自由に本を読むようになりました。殊に、引っ越しをして、書物を片付けながら、いろいろなものを手に取っているわけです。それまでは、書物を開く時は、必ず何か必要があつてものを調べたり、ある目的のための手段として読んでいたのですが、幸い今はそういうことなく、自由に手に取った本を読ませていただいています。片付けていると、何となくその書物の方から、「しばらく放つたらかされたけど、なぜ私のこれを読まないんだ」というふうの本の方から声を掛けていただいているような感じで、まさしく感応の状態であります。その中にたまたま1冊の書物がありまし

た。それは、『世事見聞録』という書物だったのですが、著者は武陽隠士と書いてありました。「武」というのは武蔵の国の「武」、「陽」ですから、その南側にいる世捨て人のような方なのでしょう。その武陽隠士と名乗っておられる方の『世事見聞録』は、私もそれを調べようとして読んだのではないのですが、片付けている時に出て来たものですから、段々引きずられるように、しばらくその書物を興味を持って読んでおりました。これは江戸時代の文化13年(1816)に著されたと記されております。その中に、寺院の僧侶、或いは神社の神官の方について見聞したところを記した箇所があって、それを読んだら止まらなくなってしまうわけです。その一番最初の書き出しからして刺激的です。「僧侶は御代の結構なる故に、さらに困窮を知らずして衣食住を極め、安楽に身を過ごすこと無類なり。殊に世に養はれ人の陰にて立ちゆく身の程を忘れ、ことごとく高慢に構へたるものなり。元来、出家は孤独の類なり」というような文章から始まって、更にずっと続いているのですが、「猥りに嵩り俗をないがしろにし人を助くる志なく、俗よりも欲深く……」、こんなことを言っていていいのでしょうかね。「また偽り多く、衣帯美装を飾り、身の栄華を専一として、あるいは大木・大石を費し、人力の労をいとはず、堂社を建立し、荘厳・彫物・厨子・戸帳に金銀を鏤め、結構を尽して世を費し……」、ちょっとこの辺まで来ると、胸が痛んだのですが、こういうような文章が延々と続く。更にもう少し読んでいくと、「今の世にては、神仏の道はことごとく国賊なり。釈尊は人を治め、世を補はんがために教へ施し給ふ。無我・無欲・清浄・不垢の法も、末に至れば……」、そういう釈尊の教えも、「……末に至ればかくの如く、禁戒の第一とする貪欲・瞋恚・邪淫・妄語・飲酒は常の事になり、すべて仏法、泥の如くなりて、云々」というようなことが書かれているわけです。この辺まで来たら私は段々どきどきしてきました。更に読み進むと、「仏法の道をことごとく失ひ果てしもの、本願寺宗なり。云々」ということがあって、京都の両本願寺、云々と……、あとは省略をさせていただきますが、そのような文章を武陽隠士と名乗る方が文化年間に記されていました。

この本は、必要があってではなくて、片付けている最中にたまたま手に取った書物だったのですが、読んでいて、私は内心忸怩たるものを感じました。それが、文化文政、文化年間の、先ほど申しましたように1816年のことで、寺社以外の項目もたくさんあるのですが、その当時の世事、世の中というのはこういうものだったのかなと思っていたわけです。

また、片付けをいたしておる時に、ある雑誌を手にとって、これも整理していたんですけども、その中に、私も大変いろいろご教授をいただいた塚本善隆という中国仏教の先生の文章に接したわけです。先生が愛知学院大学でご講演をなさった中にこういう文章がありました。「今日の仏教の研究は隆盛になり、しかも、文科系の大学にて仏教に関する講座ができておりますのは、私は明治初年の廃仏毀釈のお蔭であると思います」。私もお世話になっていた文科系の大学に講座ができたのは明治初年の廃仏毀釈のお蔭ですと塚本先生はお話しになっておられました。「あの廃仏毀釈がなかったら、今日の仏教界の、少なくとも研究部門、或いは社会活動において、おそらく今日のような力を生み出すことはなかったであろうと思われるのであります。廃仏がなかったら、もっと衰えた旧態依然とした仏教が今日まで僅かながら続いておった、寺に残っていた、僅かながら仏教が寺に残っていたというような状態になっておったのではないかと思われます」と、塚本善隆先生がそのようにお書きになっていると言うか、お話しになったのが活字になっておりました。そのよ

うな私の身の状況の時に桂先生からお電話をいただいて、何か東アジアの宗教の多様性、或いは現代の課題というようなことについて考えていることがあれば話をするようにとおっしゃっていただいたわけです。それでも随分躊躇していたのですが、今日こうして寄せていただいたわけです。しかし、この『世事見聞録』をその後ずっと読んでみると、一々思い当たるわけであります。そのことが書かれたのは、先ほど申したように、文化年間、1816年のことです。それからちょうど50年、半世紀、正確に言うと52年後が明治初年に当たります。先ほど少しご紹介したような、日本の仏教の、お寺の有様が、半世紀、52年経って、明治の初年に神仏の判然令と言うんでしょうか、それから廃仏毀釈が起るわけですが、今言ったような、武陽隠士から見れば好き放題に見えたお寺が50年後に廃仏に遭うというようなことを思って、ああ、これはどういうことであろうかと関心を持ったわけです。

ご存じのように、中国では、「三武一宗」という大きな廃仏が行われました。資料1（文末の資料篇を参照。以下同様）にそのことを記しておきました。中国における2000年の歴史の中で、大きな廃仏毀釈が4度ありました。「三武一宗」と言い習わしているわけですが、どなたが最初に言われたのかなど、かねがね思っておりましたが、資料に記しておきましたとおり、南宋の志磐の著した『仏祖統紀』の中には、4つの廃仏毀釈を順次挙げております。ご存じのように、北魏の太武帝の446年から452年の廃仏が第一であるというようなことが書いてあり、あらまはそこに記されているとおりであります。その首謀者であった崔浩は、廃仏の後、腰斬と言うのですから、体を真っ二つに切られるような重い罪に処され、また、太武帝も病気になったとか、いろいろなことが書いてあります。そして、次の文成帝が位に就いて、仏法が更に興隆した。これが最初の北魏の廃仏です。その次に、北周の武帝は、衛元嵩という人の提言によって廃仏を行ったということが書かれ、それが第二であるとあります。北周・武帝の廃仏があり、その後に更に、唐の武宗の廃仏、それから、後周の世宗の廃仏というのがずっと記されています。いずれも、その廃仏が終わった後、更に仏法が興隆するというようなことが書かれております。先ほど申し上げましたように、『世事見聞録』を読んでいくと、どうも仏教に対して随分厳しい批判をされているわけですが、それが52年後に明治の廃仏に遭い、そして今日を迎えております。そういうことを考え合せた時に、一体どうしてこのようなことになるのかということをお私なりにいろいろ思いを寄せることになったわけです。

それぞれの廃仏についてお話をすればよいのですが、それはいろいろ紹介もされておることありますから、それはそれとして、その廃仏の後、例えば資料3のところに、上世に三武の皇帝がいて、邪悪な下臣の要請に従って廃仏毀釈を行ったけれども、廃仏が終わった後、いよいよ仏法が興る、そういうことが張商英の『護法論』の中に書いてあります。実際、中国における廃仏があった後、北魏の後にもまた、たくさんの寺院ができたり、或いは多くの石仏や石経が造られたりするわけですし、また、北周の廃仏の後に、また隋、唐の、言わば中国仏教の全盛期と言いますか、黄金時代を作り出します。そのようなことがあるので、このことを少し眺めてみることもいいのではないかと、また先ほど言った『世事見聞録』を書いた方は、これは果して排仏論者なのか、崇仏論者なのかということをお思ったわけです。これだけ厳しい世事、お寺の様子や僧侶の様子を厳しく紹介しておるこの方は、仏教は駄目だと言っておるのか、仏教は大事だと言っておるのかということに非

常に関心が起ってきたわけです。

そうして見ますと、中国の歴史を振り返ると、そのような形ですとずっと廃仏があり、その後再び興隆してくる。そして、先ほど言ったような『仏祖統紀』を読んでいて、改めてそれぞれの廃仏はどういうものかということをおもった時に、例えば北周の、「周」という国名がやはり国のビジョンと言うか、理念を示しているのではないかと思います。古い周公、或いは『周礼』というような中国伝統の礼を国の理念とかビジョンに掲げている国であると、やはり伝統的な中国の礼と仏教とが、どこかで対立します。後周も「周」でありますし、そういうふうなことも大変興味を持って私の中で課題になっております。更に改めて、唐の会昌年間の廃仏、この様子については皆さんもご存じのように、円仁の『入唐求法巡礼行記』の中に詳しくその様子が書かれております。これを読むと、また、こういうことで廃仏が行われ、こういうふうには事は進んで行くんだなということをお改めて考えさせられました。そこには一々記しておりませんが、唐の王朝は、もちろんご存じのように李氏です。この「李」という字ですけども、道士が、この「李」という字を分解すれば「十八」となり、18代目に滅ぶという意味だということに語ったという。それだったら木村の「木」も「十八」というふうになる。また、分解すれば「十八」と言うけども、逆にすれば「八十」ということにもなるわけだし、何とでも言えるのではないかと思います。しかし、その言葉を真に受けて、当時の皇帝は15代目だったものですから、そこで廃仏を行う。更にこの事が進んでいくと、その18代目の時、黒い衣、仏教が滅ぼすというふうには勘違いをする。更に、円仁さんの書かれた『入唐求法巡礼行記』には、その皇帝が勅を出して、全国の手押しの一輪車の使用を禁止したことが記されています。一輪車を使用した者は死刑に処す。死罪だといっております。一輪車を押して死刑になったらたまったものじゃないんですけども、なぜそんなことを言うのか。一輪車は道の真ん中を傷付けるから、道教を奉じている者としてはそれは看過できないから、一輪車を押して道を傷めるものは死罪という命令を出したのです。更に、黒い犬、黒い動物を皆殺せと言う。それは、黒いのは仏教と連想をしているわけですね。皇帝が一度そういうことを思うと、とてつもないことをやらせます。一輪車が駄目で、一輪車を使えば死刑だと、こういうことに相成ります。随分これは訳のわからないことになるのではないかと思います。

しかし、北魏の太武帝以降、大きな廃仏毀釈が数度行われるのですが、それ以前に仏教が紀元前後頃に伝来してから400年余り、ほとんど廃仏毀釈もなく、無いわけではなかったと思いますが、大きなことはなく、非常に静かな状態で進んできました。例えば、資料4に記しておきましたが、習鑿齒という人が釈道安に宛てた手紙が『弘明集』に載っています。そこには仏教が東の中国へ伝わって来てから、仏教を奉ずる者があったとしても、そんなに多くはなかったというようなことが記されております。そして、東晋時代になると、明帝の時、皇帝自らが、如来の絵を描き、非常に崇仏の姿を取ったことが記されております。仏教が伝来して以降、400年余の間、中華の国に、なぜ仏教に対する極端な廃仏、或いは排除、排斥が起らなかったのかというようなことが、いろいろと考えさせられるわけです。更に言えば、東晋の皇帝がなぜ急に如来のお姿を描く、崇仏の姿を取るようになったのかということもまた大変に興味深いことです。

振り返って、紀元前後頃に仏教が伝来したと言われておりますけども、それからしばらく、排除されなかったのは、結局、仏教の教団が社会的に影響を与えるまでにはなってい

なかったことが大きいと思います。同時に、仏教が正しく理解されることなく、中国の伝統的な黄老や神仙と言ったものとほとんど区別なく、不死・長生を願う宗教と同じように理解されていたことも大きな原因かと思われます。その一つのバリエーションみたいなもので、外国の宗教というような感じではなく、元気で長生きしたいという現世の利益を願うような、そういう信仰と同じように受け取られていたのではないかと思います。例えば、その一例として、資料5のところには楚王英という、楚の王様の信仰が書かれております。この方は、後漢の明帝の異母弟と言いますか、母親が違いますが弟になる方です。皇帝が、何か大きな罪を犯した者に対して、白い絹を納めればそれを許してやるというようなことを言った時に、楚王英は何を思ったか、自らそういうものを献上しました。しかし、彼自身がそういう死罪になるような大きな罪を犯しているとは思われぬのです。そこで明帝が、楚王英は「黄老の微言を誦し、浮屠の仁祠を尚ぶ」、つまり、潔斎して神と誓いを為しているような非常に信心深い人だというようなことを言って、彼の弁護をします。更に、彼がその罪を贖うために納めたものを、そこに書いてありますように、伊蒲塞（優婆塞）や桑門（沙門）達に、そう呼ばれるような人たちが当時いたということの意味するのだと思いますが、それを皆に還してやれと皇帝が言っています。ここで、その黄老の信仰や神仙の方術というものと、浮屠、浮屠というのは仏陀、仏のことですから、浮屠を奉ることがほとんど区別なく行われています。そして、それは取りも直さず、前述した不死・長生を願うような信仰であり、仏教の教えもまたそういうものとして受け取られていました。その当時、まだ中国の出家者というのはほとんどないわけですから、西の方から来たお坊さん達を中心で、そういう人たちが皆、不思議な力、神異と言いますか、超能力のようなものを持った方々で、そのような人々の道術、或いは神通力のようなものを信仰することが行われました。それは、当時の民間の信仰とほとんど区別が付きません。仏教は、インドの宗教というよりも、中国の信仰と同じような形で受け取られていたのではないかと。そういう状態がしばらく続くのです。従って、廃仏が起ってこなかったということです。

実際、初期の仏教で活躍した方々の伝記を改めて見てみますと、皆、不思議な能力を持った方々です。最初に中国で経典を翻訳したと言われる、安世高にしても、鳥の鳴き声を聞きながら、未来を予測するとか、或いは、南の方へ仏教を最初に伝えたと言われる康僧会も、非常に不思議な力を発揮しました。従って、今言ったような神仙・方術と同じように理解されておりました。そういう時代が300年、400年続いたと思います。それが先ほど、習鑿齒が道安に与えた手紙の中にもあるように、400年ほど経過して、東晋の皇帝が仏教を信仰している。それにはそれなりの何か一つの転換点と言いますか、きっかけのようなものがなくてはならないと思います。それはやはり、よく言われるように、資料7に挙げておきましたが、永嘉の乱という事件が大きな影響を与えたのではないかと思います。

西晋の終り頃の永嘉年間、307年から313年頃に、漢民族以外の、いわゆる五胡と言われる民族の人が反乱します。匈奴だとか氐だとか羌とか鮮卑だとか羯とかいうような部族が乱を起し、それによって、西晋の皇帝が、何万人の人たちと同じように捕らわれて殺されました。宮殿は焼かれ、陵墓はあばかれ、北の洛陽の都は廢墟と化し、そこに住むことができなくなるというような大きな事件が起ります。今まで中国を中心とし、周りは皆、野蛮な人々だと言っていた漢民族が、その周りの国々によって自分達の陵墓が掘り起される。そして、長い間住み慣れた、洛陽や長安から移らざるを得なくなり、東夷、西戎、南蛮、

北狄と言って軽視していた人々から、大きなしっぺ返しを喰らうことになります。それにはまた背景がいろいろあるわけですが、いずれにせよ、結果はそのようなことで、漢民族が大変な打撃を受けて、そして南の方へ、洛陽から見れば東の方へ移って、そして、東晋という国を建てなければならなくなりました。

懇ろに読んでいるわけではありませんが、中国の歴史書を読んでおりますと、例えば「漢」という字の扱いなど、北の方の北齊などの歴史書に書かれているものと南朝の歴史を書いたものとは、同じ「漢」という字でも扱いが違います。同じ「漢」という言葉でも、「悪漢」もおれば「好漢」もいるわけで、いろいろありますが、北朝の歴史を書いた本の中に出て来る「漢」は随分悪く書かれています。要するに、誇り高き漢民族が非常に蔑まれております。「一銭漢」と言うか、1万分の1もないような「漢」、「暴漢」だとか「悪漢」だとか、例えば「痴漢」というのは「愚かな男」という意味です。漢民族の中では自分たちのことを愚かな男と言うようなことはないのではないかと思うのですが、正史の北史だとか北齊書だとかの「漢」に、そういう事例が出て来るということは、今まで、東夷、西戎、北狄、或いは南蛮と言っていた周辺の異民族から、今度は逆に漢が「痴漢（愚かな男）」と呼ばれるようになる。「暴漢」とか、「悪漢」とかという言葉が出て来るというだけでも、やはり大きなもの見方と言いますか、文化の転換を来しておるのではないかと思います。

そうすると、かつて長安や洛陽にいた人たちが南の建業(建康)へ移って、東晋の時代になった頃に転換するというのは、わからぬわけではありません。そうすると、外国の宗教であった仏教が中国に伝来してすでに400年ぐらいの歴史があるのですが、改めて、一体それはどういう教えなのか、一体何を説いておるのかというようなことに対する関心が起ってきます。しかも、南の方へは、おそらく、シルクロードを通して来るインドや西域の僧侶は少なかったと思いますから、改めて仏教の経典を読んだり学ぶと、仏教の中にも、ああ、こういうことが説かれているのか、我々の及びも付かないことが説かれていることに気づくのです。その中で最も彼らを驚かしたのが、要するに三世の因果です。『後漢紀』という書物の中には、私達はこの現在だけではなくて、過去・現在・未来の三世の中で生きており、三世の業の因果応報があるということを聞いて、王侯貴族はみなびっくり仰天したというようなことが記されております。こうして、改めて仏教に対する関心が少しずつ起ってきます。

その中で、今言ったような、東晋の皇帝が仏の御姿を描いて、仏教を信仰する、崇仏するならば、それが人々に影響を与えてくるのは、自然の流れであろうかと思えます。それで、一度皇帝がそういう仏教信仰に入ると、次々と仏教の信者が増えてきます。そうすると、仏教を今までと同じように、中国の神仙・方術や民間の信仰と同じもの、ほぼ変りはないのだと思って放置しておくこともできなくなってきました。例えば、その一例を資料8に記しておきました。曩には(昔は)、東晋の人たちが仏教を奉ずることはほとんどなかった。出家の沙門は皆、西から来た人々でした。異民族の安息であったり、康居であったり、或いはクチャ(亀茲国)であったり、そういうところからやって来た人たちが仏教を信仰していたけれど、今やそうではなくて、皇帝が如来の絵を描く。これは有名なことであって、『歴代名画記』の中にもそのことが記されており、非常に画期的と言いますか、大きな影響を持つ出来事であったわけです。今や「主上」、要するに皇帝も「仏を奉じ」、そして、「親しく法事に接し」、仏事を行うようになってきて、「事は昔に異なる」とあります。そ

うしてくると、改めて中国の「礼」という伝統的なものの考え方によって、仏教の教団も律していかなければならないということ、この東晋の桓玄という人が述べています。これが初めてではなくて、実際には、出家者も皆、皇帝を礼拝せよと、敬礼せよということは、桓玄よりも50～60余年前から議論があったのですが、その議論は十分はつきりしないまま終わっています。

しかし、改めてこの桓玄という若き実力者がそういう問題を提起したのです。そして彼は、ご存じのように廬山の慧遠とやりとりがある。慧遠は、沙門は王者に対して礼をしない、方外の賓であると言います。そういう世俗や世事の外側にいる者だから、皇帝を礼拝しないということです。仏教教団の世俗との違いを慧遠は書いていますが、桓玄と何度かやりとりがありました。それにいろんな人たちが関って、教団といえども、国の法律で罰しなければならない。要するに、王法と仏法との様々な議論が展開されるわけです。

しかし、その結論も、資料9にありますように、「仏法は宏誕にして了する能わざる所なり」と言い、「今や事は既に己に在り」というようなことを桓玄は言っています。最早、私の一存でどうにでもなるとして、仏教の出家の人たちも教団も、国王、皇帝に対して従いなさいという命令をほぼ撤回するわけです。資料にある「誕」というのは、仏教は非常に大きなことを言って人々を騙すと言いますか、そういうような意味合いに使われております。その後も盛んに、仏教は非常に大きなことを言うけれども、よくわからないという議論が廃仏論者から提起されるのです。東晋の実力者である桓玄もまた、「仏法は宏誕にして了する能わざる」、つまり、自分にはよくわからないから、慧遠の言うことも受け入れて、今やそのことを許すというようなことを言っているのであろうかと思います。ただ、そこで「事は既に己に在り」というのは、桓玄は、私の一存で何とでもできるんですよということを言っているわけです。仏教がいくら方外の、政治・経済の外にあると言っている、桓玄からすれば、やろうと思えばいつでもできますよということを言っておることになるかと思っています。

資料10にあるように、桓玄は、中国の伝統的な「礼」の範疇に仏教を包み込んで王法の支配下に入れようと目論んだのですけども、それは、今言ったように、それはそれとしてということになります。しかし、そこで全ては終るわけではなく、今度はいわゆる沙汰の問題が起こった。「沙汰」というのは、「沙」は文字通り「沙(すな)」のことで、「汰」は選り分けると言いますか、仕分けのことですから、真の出家とそうでない出家を選り分け、仕分けをしなければならないということが、新たに問題とされるのです。最初は、伝統的な中国の「礼」という価値観の中へ仏教の教団も全部包み込もうとしたわけですが、慧遠の言うように、仏教は方外の人で、出世間だとしても、本当に皆同じように真の沙門、出家者として認めることができるのか。もしそうでないとしたら、今度は選り分けなければならないではないかという問題が生じてきます。「礼」の問題から、次に「沙汰」の問題に移ってくるわけです。それが、資料11に記されているように議論が進展してきます。仏教の貴ぶ所は無為であると。そして、懇懇に、丁寧にその意欲を絶つ、絶欲ということを行っているのに、この頃の都の出家者はどうかと言うと、先ほどの『世事見聞録』の中に記されているような状態になる。更に加えて、避役、国民としてなすべき労働を避ける避役や、或いは出家者は税を免除されているわけですから、そういう人たちが増えれば国に税金が入ってこなくなる。そうすると、どういう者が一体本当のお坊さんであるのか。どれ

が偽のお坊さんなのかということが問題になってくる。税を逃れ、或いは、その労働義務を避けて出家する私度僧のような者が増えれば、当然、国の税収が少なくなってくるわけです。そこで、真の出家者が問題になってくるのです。都を見渡すと、どうもそういう、胡散臭いのがたくさんいるのではないかと桓玄には見えたのだと思います。

そこで、本当の僧侶とは一体どういうものか。それは、よく仏教の經典の教えを理解し、その教義を十分解釈して、敷衍して説くことのできる者、それが出家の沙門ということになる。或いは、定められた戒律に虧けるところがなく、戒律をきちんと守り、いつも清浄なところに住んでいるような者が沙門であり、出家者と言えるのです。或いは、山林に住んで、山居して、悟りを求める、或いは涅槃を求めるというような、そういう志をずっと持ち続けて、流俗・世俗の流れに加わらない、そういう名利に惑わされない者が本当の沙門であり、すなわち世間から「あなたは出家者」だと言えるかもしれないが、それ以外の、今言ったような真の僧侶・出家者に値しないような者は、税金や労働を逃れるために、僧と称していることになると桓玄は言うのです。

こうして、今言ったように、その真の出家・沙門とそうでない者とを選り分ける「沙汰」、言わば淘汰することが課題に挙がってきます。当初は、仏教全部を同じ国の中で一つの法律で取り締まろうとしました。そうすると、仏教の主体性と言いますか、伝統が守れなくなるわけですが、それについては撤回した。しかし今度は、そうではなくて、真の沙門と言いますか、真の出家者とそうでない者とを区別する。そういう「沙汰」の問題が起ってくるわけです。それに対しては、沙門は方外であり、そういう政治や経済から離れた者だということを主張していた廬山の慧遠も、それは私も賛成だというような意味合いのことを言うわけです。僧侶の肅清という桓玄の主張に対して、慧遠が賛意を表明しているように見受けられるということです。この「沙汰」の問題、要するに戒律を守らず、真の沙門とは言えないような人たちが非常に多いという問題が起こったのが、龍安 3 年と言いますから、西暦でいうと 399 年という年です。399 年という年は、私の記憶の中では、法顕三蔵が戒律と律蔵の原典を求めて中国からインドへ向かって出発した年であったように思います。南の方で、今言ったような、本当の沙門とそうでない税金逃れのための沙門との「沙汰」の問題が起っている時に、北の方で法顕がやはりきちんとした戒律を中国へ伝えて、それによって教団の在り様を律していかねばならないと言って出発した、その年と一致するということが非常に興味深いし、ということは、取りも直さず中国全土の中で、言わばそういう問題を惹起することになっていたのではないかと思うわけです。

沙汰をするためには、先ず国家の権力によって、その名簿を確定し、名簿を整理しなければなりません。そこで、桓玄は、義務的な労働を避けるために入り込んだとか、税を逃れるために入ったとか、或いは犯罪を犯して逃れるために入ってくるとか、そういう出家者をきちんと把握するためには、名簿を明らかにしなければならないと言うわけです。『弘明集』に収録された資料 12 は、支道林(支遁)の名前を借りた都の沙門等が書いた手紙ですけども、そこには、「近頃、しきりに州から通達を受け、沙門の名簿を求められており」、要するに名簿を出せと言われ、大変に切羽詰まって甚だ厳しいものであることが述べられています。桓玄は、その頃、帝位に就いていますが、一体どのような考えなのかよくわからないという。大変厳しく、憂慮して、とても物静かに禅定(座禅)をするようなこともできない、或いはお勤めもよくできないという。それで座禅もできない、お勤めも

できないというところがそもそも問題なわけですが、「沙汰」されると私たちは大変困るというのです。更に、朝方まで眠れずに悲嘆に暮れているというような手紙を出しているのです。東晋時代の佛教教団の「沙汰」の問題は、大変大きな問題を引き起したと思われるのです。

しかし、廬山の慧遠はそれに対し、先ほど言ったように、私は、それはもっともだというような意味合いのことを言って、資料 13 に書いたように、沙門、出家者というものはこういうものであると述べています。一つには、静かに座禅をして、その悟りを求め、悟りの境地に入っていきような者、或いはお釈迦さまの、仏の説かれた経典を読んで、それを深く味わう者、或いは、様々な福業をする者、こういう者が沙門、出家者であり、それ以外の者はやはり、桓玄の言うように、「沙汰」されても止むを得ないというように慧遠は考えています。これをみると、宗教的な実践をする人と、仏教の経典や仏教の教義をきちんと研究する人と、社会的な福祉活動を行うような人、こういう人たちが仏教の僧だと慧遠は言っているように見受けられます。更に、桓玄の意向を受けて、慧遠自身が更に詳しい規定を作っています。そのことが、『高僧伝』の中に説かれていたように思います。慧皎の『高僧伝』の「慧遠伝」に、この桓玄の、本当のお坊さんと、今言ったような動機不純なお坊さんを選び分けるという沙汰の意向に因んで、それをきっかけにして、要するに更に厳しい禁制を慧遠自身が作ったことを記しています。「玄、これに従う」と、桓玄が慧遠の禁制を認めて、それが行われるようになるのです。慧遠が規定を作り、本当の出家者を更に教育しようとしたわけです。そうすると、桓玄自身は、その廬山の慧遠の教団というものは道德のあるところだ、非常に徳の高い僧侶、それから真摯な修行者がいるから、廬山の教団、慧遠の教団はその例外にして名簿を作らなくてもよいとするというような有名な事が行われる。要するに、仏教教団を国の法律の中で律していこうという、そういう「礼」の問題から、やがて教団の中における僧侶の真偽を選び分ける「沙汰」の議論に移っていくわけです。それは取りも直さず、仏教が少しずつ少しずつ国家の権力の中へ組み込まれていくことを意味します。

今言っているのは東晋のことですから、南の方の様子です。しかし、北の方は、それとはまた非常に違う様相を呈しております。資料 14 に北朝のことを少しメモしてありますけれども、後趙の石勒・石虎という王は、西域から来た、おそらく亀茲の出身者である仏図澄を非常に尊敬し、国の大事な宝物として信頼します。その細かな様子がずっと仏図澄の伝記の中に書かれています。仏図澄という人は、非常に優れた、不思議な力を持った神異僧ですけれども、乱暴な石勒や石虎を、不思議な力でもって信服させます。石勒も石虎も仏図澄に非常に敬意を表します。おそらく亀茲から来た人ですから、有部（説一切有部）の教学も修めて、そして、釈道安などの教学の人たちもその門下から育っていくわけですから、不思議な力だけの人ではなかったと思います。王様の石勒や石虎を信服させるためには、様々な不思議な力を使って、そして、後趙の国宝として国師の地位を占める。北の方は、概ねそのような國王と名僧との関係が続きます。

その後のところにありますように、前秦の苻堅と道安、或いは後秦（姚秦）の姚興と鳩摩羅什、これもご存じのように、苻堅が襄陽（じょうよう）というところを 10 万の軍隊で攻めて、そして自分は習鑿齒と釈道安を得たんだと言っております。10 万の軍隊を使って道安を自分の国へ拉致したのです。道安を招くために軍隊を出して、そして自分の政治顧

問にしようとしします。それから姚興もまた、鳩摩羅什を迎えるために7万の軍隊を出して、この羅什を長安に迎えている。迎えると言えば聞こえは良いですが、無理矢理、言わば拉致に等しいわけです。苻堅は道安を、姚興は羅什を迎えています。これは何のためか。それはやはり、それぞれ自分の国の国益のためです。仏図澄の不思議な力を借り、道安は中国の仏教の歴史の上で大きな功績のある人ですが、伝記を読むと、やはり不思議な力を発揮している人でした。羅什は有名な經典の翻訳者ですが、その伝記を読むと、姚興は、羅什が寺院から出て別のところに女性と一緒に住むことを認めたとあります。それは何のためでしょうか。羅什がそれを望んだわけではなくて、姚興が、姚秦の国のために羅什のような優れた人間の子孫を残したかったからです。結局、自分達の国のために羅什の知恵を借りたいと言うのだから、それは取りも直さず国家のために、羅什の子孫を残そうとしたのです。これらの人々はあたかも道安や羅什に対して、非常に尊敬し、信服し、そして崇仏したように見えるけども、なぜ崇仏をしているかと言うと、結局、国の繁栄のために、国益のためにやっているということです。でもそうすると、ある目的のための手段として崇仏しているということになります。こういうのは果して本当に崇仏と言えるのかどうかと思うのです。

北涼の沮渠氏もまた、有名な『涅槃経』を翻訳した曇無讖に対して異常に対応しました。曇無讖は大呪師と言われるように、予言したり、将来を見通したり、やはり不思議な力を持った人物でした。そういう予知をする人がいればとても便利です。曇無讖が、更に『涅槃経』のテキストを求めてインドへ行きたいと言ったら、敵の国へ行くのではないかというので刺客を送って殺してしまう。これは本当に仏教のためと言うか、曇無讖を尊敬しているのか、はたまた自分の国の永続のためにやっているのか非常に難しい。この今言ったような国々の人たちは皆、漢民族以外の胡族の王様ですけども、非常に仏教を大事にしているように見えますが、その崇仏が、取りも直さず国家のためで、国を繁栄させるために行われていたのです。

資料 15 に書いていますが、沮渠蒙遜が、西秦の乞伏氏の国を攻めようとする。ところが、それに負けて、自分の皇太子が捕らわれ、捕虜になって殺されてしまう。そうすると、「一体、私は仏教を信じておるのに、何でこんな戦争に負けるんだ。しかも、自分の大事な息子を、皇太子が殺されるとはいかなることか」というようなことを言います。そのところに、「事仏無応」ということがあります。仏に仕えておるのに何にも応答がないではないかと。そうすると、たちまち廢仏をしてしまう。それまで一生懸命に僧を尊崇し仏教を信仰していたのは何のためかと言うと、国のため、富国強兵のためであるということになります。

そうすると、ご存じのように、北の方の皇帝は皆、仏と同じだというような考え方が行われておりました。当然「沙汰」の問題も、今言ったような考え方を進めていけば、究極は、北魏や北周の廢仏になってしまいます。殊に、北周の廢仏は、今は国の中にお寺がたくさんあるけども、そういう様々なお寺が、曲がったものの方の見方の、曲見の伽藍だということで、そういうのを全部取っ払ってしまって、この国全体が一つの大きなお寺のように考えればよいということになり、平延大寺という、国自体が一つのお寺、仏国とみなしました。そこにいる皇帝がきちんと政治を行えば、それは仏と同じことになり、国が良くなることが大乘仏教で言う慈悲を施すということになるのです。間違っただけの見方をして

いるお寺は取っ払って、お坊さんは全部還俗させて、仏具は全部取り上げて、それで武器や農機具を作って生産すれば、富国強兵の国ができるのではないかと考えました。それはどこかで聞いたような話で、神国で現人神のような人がいて、というふうな考えと同じようなことを、北周の廢仏で実行されるのです。

更に、今言ったような中で、北の方でいろんな議論がなされて、そして廢仏になっていく、それはやはり南と北との違いもあって、何となく国家中心の崇仏と言いますか、国家のために、仏に仕えることによって、効果がなければすぐに廢仏する、効果があれば信ずるといような、そういう信仰は廢仏を惹起することになります。江戸の大田南畝（蜀山人）が、「損か得か、楽か苦か、何じゃかじゃと、あとはむちゃくちゃ」という狂歌を残しておりますが、「損か得か、楽か苦か、何じゃかじゃ……」という基準で行えば、それは役立つもののはすぐに切り捨てろ、そうじゃないものは残せと、こういう話になって廢仏を惹起することになります。教団の中のいろんな問題がそれを引き起す縁になっているとすれば、やはり大いにもって滅すべきと、私はそれを読んで思ったわけです。

様々なそういう議論の中で、仏教についてのいろんな問題を引き起します。それらの議論の中で大きく取り上げられ、仏教はけしからん、或いは、仏教は良いという議論を要約すれば、資料 19 に記しておきました「沙汰」の問題、或いは「礼」の問題、いろんな問題の中で常に議論されるのはどういうことかと言うと、梁の僧祐が『弘明集』の終りのところに、それをまとめて書いております。要するに、一つには教説（仏教の經典）に説かれていることは甚だ迂誕であると、非常に大きなことを言っている。三千大千世界だとか、そんな大きなことを言っている。そのことが人々によく疑われているのではないかということです。二つ目には、「人死して神滅し、三世あること無し」と。仏教は三世を説いておるけれども、そういう三世というものがあるのかないかと、これがその人々の疑いの元になっているということです。更に、本当の仏というのは見たこともないし、先ほど言ったように、税金を逃れたり労働を避けたりする偽の沙門たちが多いことから、そういう人たちがいれば、国の政治・経済のために益がない。そういうものだったら除いてもよいのではないかと、このことが一つの疑いになっております。更に4番目には、「古には法教無く……」、仏教と言っても、漢の時代に伝わってきたのだから、それ以前に、中国の儒教のように古の聖人の時代にはなかったではないか。仏教は大変新しいものである、こういうことがつねに議論されるのです。更に、仏教は、中国のものではなくて、西の方から伝来した異民族の、夷狄の教えである。中華の人々がそういうのを信じてはいけないのだということを、人々は言います。更に、漢の時代には仏教が繁栄しなかったけども、今、晋の時代になって盛んに仏教が信じられたのは、これはどうしてなのか。こういうことが疑われて、そして仏教が排除されるのです。そういう議論が起っているということが『弘明集』の後序に説かれております。

同じようなことが、最後の資料 20 のところにも書いております。顔之推という6世紀の人が「家訓」を残しています。その「帰心篇」に、自分の信仰について語ったところに、なぜ一般社会で仏教を非難する、或いは排斥するのかについて記している。それを要約すれば大体5つぐらいに分類できるのではないかということが述べられております。顔之推は元々は儒教の人ですが、仏教に対する信仰が大変に厚いのです。その「家訓」に、一つには仏教がこの世界の外のことを語っております。また、その説法があまりにも神変不思議

議極まることを述べており、そのことがなかなか信じられない理由ではないか。仏教者がそのことに対して正しく説明しなければならぬということ、顔之推は私達に言い残していると思われる。更に、第2番目には仏教の説く吉凶禍福、因果応報がすぐに現れないのはどうしたことか、これは疑問だということです。これに対しては、前にも慧遠が『三報論』で、報と言っても、今現れるものも後で現れるものも、様々な報がありますよということを説明していますが、そのことがやはり仏教がなかなか信じられない理由ではないかと顔之推は言っております。更に3番目には、僧尼の修行が粗雑で純粹さに欠けたものが多い。これも先ほどの『見聞録』にもあったように、やはり仏教が排斥される一つの理由を惹起しておるということ、顔之推もまた指摘しています。更に、様々な金とか銀とかの財宝をぜいたくに使うことを指摘しています。これは、文化文政の先ほどの『世事見聞録』の中にも詳しくその様を書いております。本願寺は二重の屋根になっておって、材木をたくさん使ってとか、いろいろ語られている。それは省略しましたがけれども、詳しく書いています。それと同じようなことを顔之推もまた指摘をしているのです。加えて、租税や義務的な労働を避けるということです。税金を納めないような人たちが増えている。そのことが国益に反するので仏教が疑われ、排斥される理由になっているのではないかと。更に5番目には、因縁と言ってもその応報というものなかなか見えない。三塗と言っても、今様々な修行をしている身がその後の世でどうなると言われても、それはなかなか人々の信仰を得ることが難しいのではないかとということ、顔之推は家訓の中に書いてます。これらは今から1500年も前に彼は言っているのですが、今日もそういうような思いがあるのではないかと、やはりそれに対してきちっと信念を持って説くことが、崇仏と言うか、仏教に対する信仰を喚起することになるのではないかと、この文章を読んで思うわけです。その他にも、いろいろなことが書いてあります。

そして、顔之推は『顔氏家訓』の最後のところで自分の遺言のようにして仏教信仰を語っております。それは、春夏、四時のみたまの祭の祭祀に際して、周公や孔子様の教えのように、生贄を捧げるようなことは止めて、殺生はしないでほしい。敢えて殺生してまでそういう祭祀を捧げれば却って罪業を深めることになるので、自分にはお盆だとか仏事をやってくれればいいということ、言い残しているのです。今、言葉足らずですけども、外見いかにもその僧侶を国の宝、国師のように遇しておりながら、その実、今言ったように、「事仏」、すなわち仏に仕えているのに関らず、その効果がないではないかといつて、それを害するような皇帝がたくさんいました。そうすると、改めて崇仏、廢仏ということは一体どういうことなのかということを考えてみなければならぬと思ったわけです。

先ほど言った、『世事見聞録』の武陽隱士、皆さんも機会があったらご一読いただきたいと思いますが、仏教のことを厳しく言っております。殊に浄土真宗に対して厳しいように私には感じられます。この人はそもそも崇仏論者なのか、排仏論者なのか、私は大変気になります。そうすると、最後まで読み進めますと、厳しいことをずっと書いてあって、今日のお坊さんたちは教えを説くのに遠いとこまでは行くのは止めて、近くだけで行っているとか、いろんなことが書かれております。そして、これを読んで、一番最後のところに、神仏というものは皆、安穩に到らん。安穩に到らしめるのだ。「くれぐれも改革を願ふものなり」と書いてありますから、これだけ厳しいことをおっしゃっているけれども、結局仏教の改革を訴えておられる。この人はやはり仏教の現実の教団を見聞するに、こんな

に問題があるが、「くれぐれも改革を願ふ」という一言があるので、この人はやはり崇仏の人ではないかと私は思います。

今日、様々な問題を目にして、何となく閉塞感におおわれている。今は田舎に住んでおりますが、教育が大事だ、宗教が大事だ、お前は二つに關っておるのに、罪は2倍では済まんぞと言ってお叱りを受けています。それは本当にそうだなという思いを強くしております。物の興廢は人によるのです。経済が問題、外交が問題、政治が問題と、私たちは思っています。確かに政治は問題だし、経済も厳しい問題です。しかし、そういう、物の興廢は全て人（にん）に由るのです。空海（弘法大師）の綜藝種智院の文章の中に、自分がその学校教育を行うのはなぜかということを書いてありますが、そこに、「物の興廢は人に由る。人の昇沈は道に在り」とあります。人間が立派になったり沈んだりするのは「道に在る」ということを記されています。人間が立派にならなければ、国の在り様も立派にならない。しかしそれは、偏えにやはり仏法によるのだという意味のことを弘法大師はお書きになっており、そのとおりでなと思いました。先ほど塚本先生が、明治の初めの廢仏毀釈によって文科の大学に仏教の講座ができて、もしそれがなければ、細々と寺の中に仏教が残っておったんだらうと仰せになっておられますが、そういうことを考え合せた時に、龍谷大学、或いは私がお世話になった大谷大学、そういう仏教の大学は本当に大きな使命を担っておるなという思いを強くするわけです。「物の興廢は人に由る」と。経済は経済の問題ではなくて、人間の問題である。政治は政治の問題ではなくて、やはり人間の問題です。そして、人を育てるのは、やはり仏法に依らねばならないと私は思っているのであります。皆さん様々なお思いがあるかと思えますけども、そのようなことを今、感じておるところであります。

私に頂戴した時間は6時半までであったと思います。少し言葉足らずでおわかりにくいことがあったかと思えますが、どうぞ意のあるところをお汲み取りいただければありがたいと思えます。どうもありがとうございました。

質疑応答

桂： 木村先生、どうもありがとうございました。

学問の素晴らしさというのは、我々の持っている常識を覆すようなことを研究することですが、今日も崇仏と排仏について、我々の表面的な理解を引っ繰り返すようなお話で、期待どおりの非常に刺激的な話をしていただいたと思います。それから、更に私がお願いしました仏教の現代的意味に関しましても、教育と仏教と両方に関っている人間として、今私達が、特に仏教系の大学が果すべき役割についてもお話をしていただいて、大変有意義だったと思います。

最後に、このプロジェクトのユニットが3つございます。南アジア、中央アジア、東アジアと、この3つのアジアを研究領域とする3つのユニットの代表者の方から一言ずつコメント、或いはご意見、ご質問をしていただきたいと思います。順序はどういたしましょうか。佐藤先生、一番近いということで、中国がご専門の佐藤先生から、よろしくお願

いたします。

佐藤：　たくさんヒントをいただき、ありがとうございました。

中国では大きな廃仏が4回あった、それが僧侶の在り方と常に関係しながら、社会問題と関りながら廃仏が行われたということ、僧侶のあり方についても、振り返って省みるべき点がある、ということも、お話の柱の一つだったと承りました。僧侶のあり方を少し考えてみますと、それでは、廃仏のなかった時代は、僧はみな戒を守ってきちんとしていたのだろうか。私は、僧侶の在りようは、廃仏のあった時代とそれ以外の時代とで、実態としてさほど変らなかつたのではないかと思っておりますが、どうでしょうか。

この点に関わって、この資料の中で1つ、私がこれは面白いなと思ひましたのは、資料11のところ、桓玄が当時の仏教教団の在り方は非常に墮落していると教条並べ立てて批難しています。その墮落の在り方の中に、例えば、「避役は百里に鍾り、逋逃は寺廟に盈つ」とあります。つまり、徭役とか兵役とかを逃れてお寺に駆け込む輩がたくさんいて、それを寺は随分抱え込んでいるというわけです。この史料の見方で角度を変えれば、当時の社会矛盾の中で、もう本当に生きる道のなかつた人々が、お寺だったら何とかしてくれるんじゃないか、生き延びられるのではないかと期待して入り込んでいる。ある時期、お寺は概ねそれを受け入れているわけです。受け入れ方に問題があるということもありますでしょう。坊さんにした上で受け入れているのか、坊さんにはしないけれども、荘園の働き手として困っている、ということはあるかもしれません。ただ、当時の仏教教団が、没落しそうな農民の受け皿として、当時の社会矛盾を引き受ける一つの窓口になっていたという見方もできるのではないかと、というふうに思ひました。

翻って近年の私たちの周りを見ますと、困った時にお寺に駆け込む人がどれぐらいいるのか？と考えてしまいます。現代の問題としても、少し考えるべき余地があるのかなという、そういうヒントもいただきました。ありがとうございました。

桂：　ありがとうございました。一応コメントをいただいて、もし、最後に先生、何かご意見がありましたら答えていただきますので。じゃあ、次、若原先生。

若原：　特に、果して崇仏と言えるのかどうかということ。私ども、中国の仏教史にはごく表面的な理解しか持っておりませんので、例えば、五胡十六国において仏教が受容された、それは異民族であるが故に普遍的な仏教の価値を認めて云々と、こういうごく表面的な理解に止まっております。崇仏ということの内実まで、私ども、実際に一次資料に当たったこともございませんでしたし、今日お話を伺って、本当に目から鱗が落ちるような思いがいたしました。その中国の仏教で、国家仏教ともう一つ民衆レベルの攘災招福の仏教と、その両方でないような形の、本来の人間の内面を問うような仏教の理解というものが、どういう形で展開し、受け継がれていったのかと、そういう根本的な疑問さえ、今日のお話でちょっと感じたような次第でございます。ありがとうございました。

桂：　ありがとうございました。じゃあ、最後に入澤先生から、お願いいたします。

入澤： 先生の話をお聞きしながら、インド・中央アジアの破仏について考えておりました。木村先生と同じく大谷大学の佐々木教悟先生がかつて「プシャミトラの破仏」という論文をお書きになられ、確か論文は山口益先生の還暦記念論集に掲載されていたかと思います。私はインド・中央アジアの仏教を専門にしております、いま、仏教伝播に関する資料を見直しているところなのですが、破仏の王としてシュンガ王朝のプシャミトラ、それから、崇仏の王としてマウリヤ王朝のアショーカ王が有名です。破仏王と崇仏王の二人が実は仏教文献ではセットで出てくることに注目しています。『雑阿含』或いは『阿育王伝』ではセットで出て来るんですね。仏教文献ではプシャミトラは破仏の王の典型としてインドの暴虐の王として言われますが、実はシュンガ王朝の時に仏教が拡大をして、この時期にパールフットやサーンチーといった大きなストゥーパが建立されています。ひとつ考えられることは、破仏というのは、これは仏教者が盛んに言っていることではないかと。

ガンダーラに例をとりますと、エフタルの破仏ということがよくいわれます。ガンダーラに入ってきたエフタルという民族がガンダーラの仏教を壊滅したと。しかし、エフタルが仏教を本当に排斥したのかと、いま、中央アジア仏教史の方で疑問視されています。エフタル王(?)のミヒラクラを破仏の王として語るの『蓮華面経』を訳したナレンドラヤシャスです。破仏を語るのやはり仏教者です。

今日、先生のお話をお聞かせいただいて、崇仏と破仏というのは、私はこれ、背中合せになっているのではないかなと思いました。最初の方でお示しいただいた資料のうち、『仏祖統紀』の中で、先生は破仏の在り様というのを4種類あげられ、その後に仏法興隆の記事が出て来ると指摘されました。私はここに崇仏と破仏の関係が象徴的に現されているのではないかと思うのです。崇仏、なかでも今日先生がいわれた「国益のための崇仏」というのは、これは言葉を換えて言えば、「護国」ということになろうかと思えます。仏教の中で護国經典だとか護国思想といった表現が、やはりこれも中国や古代日本の仏教研究の中で盛んに使われます。私たちはこれまで「護国」というものと「破仏」ということを別個に分けて考えていた。けれども、よく考えると、仏教者の方が破仏を主張し、そうすることで、崇仏ないし仏法興隆というものを願おうとしていた。そうすると、崇仏と破仏というのをセットで考えるべきではないか、護国の背中合せとしての破仏ということも十分考えられるのではないかと、今日の先生の話をお聞かせいただいてそう感じた次第です。ありがとうございました。

桂： ありがとうございました。もし、木村先生、以上のレスポンスに関して何かご意見がございましたら、どうかよろしく願います。

木村： 三先生方から、いろいろご教授を賜りましてありがとうございます。要するに今、お聞きしたようなことは、良薬は口に苦いということだろうと私は思っております。やはり、今、入澤先生がおっしゃったように、崇仏、それから破仏、廢仏と言っているのは、みな仏教徒が言っているわけですから、やはり自分にとって良く効く薬は苦く、甘く認めてくれるところは良かったなど、こう思っておるのではないかと。ですから、必ずそういう弾圧を受けた後に、それに反発してより一層仏教が興隆する。今この社会全体の価値観からすれば、私達はこれは緩やかな排仏の中にいるようなものではないかと私は思います。む

しろそれに対して、やはりどうそれを打破していくかということが大事、私たちの大きな課題ではないかと思えます。

梁の武帝の伝記を読んでおりましたら、武帝は阿育王経の翻訳の筆受をしているんです。武帝は阿育王経の訳出に際して、筆受として、実際に経典翻訳に直接関わっております。そうすると、やはり理想の王様の在り様というものはどういうものかということを考えざるを得なかったんだろうと思えます。ああいう捨身を行うことによって国を滅ぼしたと言われていています。今言ったように価値がころころ変わるのですけれども、やはり阿育王経を読みながら、捨身を行う思想的な根拠のようなものを彼は見出しているということです。やはり経典を正しく理解するということが大事になります。今日、私達の行っている仏事はどういう意味合いを持っているかということをやはり考えざるを得ない。先ほど言ったように、国家のためという、そういう目的があって、そして、崇仏ということがそのことの手段になっておりますと、本当の目的を見失うと、手段が目的化されて、ただお経を読めばいいということになります。「ただ」というのは語弊があるから取り消しますが、そういうようなことではないか。今のいろんな仏教に対する様々な厳しい歴史上の意見は、良薬は口に苦いんだなという思いを持って私は見ております。どうもありがとうございました。

桂： ありがとうございます。それでは、お時間も参りましたので、本日の講演会を終えたいと思えます。本当にたくさんご参加いただきましてありがとうございました。さあ、もう一度、木村先生に拍手をお願いいたします。

司会： では、ご一同様、合掌。南無阿弥陀仏……。礼拝。以上で公開講演会を終わります。本日はお出でいただきましてありがとうございました。なお、お帰りの際には足元が大変滑りやすくなっておりますので、十分にお気を付けてお帰りください。ありがとうございました。

木村： 本日はありがとうございました。

資料篇

資料 1 「昔より仏法の毀に遭うに四時あり。魏太武は司徒崔浩に因りて経像を焚毀し、沙門を阨戮す。既にして崔浩は腰斬せられ、太武は身に痼疾を感じ、竟に常侍宗愛の弑する所と為る。文成位を嗣ぎ、復た仏法を興す。其の一なり。周武は衛元嵩に因りて経像塔寺を毀ち、沙門を毆って俗に反らしむ。厥の後、杜祈あり。冥に入るに、周武は地獄に苦を受けて救いを求むるの事を見る。宣帝嗣いで仏法を興し復た盛なり。其の二なり。唐武宗は趙鼎真に因りて仏を毀ち寺を廢し、僧尼を還俗せしむ。帝は後、疽背に発して殂す。時に穆陵尉稱すらく、天符あり、李炎は仏を毀つを以て寿を奪い、位を去らしむるの報ありと。鼎真等、皆誅戮せらる。宣宗即位し仏法大いに興る。其の三なり。周世宗は像を毀ちて錢を鑄、寺院を廢斥す。疽胸に発して殂す。人あり獄に在りて苦を受くるを見、周通錢尽きば方に脱罪を得んの語あり。其の四なり。」(南宋・志磐『仏祖統紀』42)

資料 2 「三武一宗の法難」 ①北魏・太武帝の廢仏(446—452)、②北周・武帝の廢仏(574—578)、③唐・武宗の廢仏(844—846)、④後周・世宗の廢仏(955—959)

資料 3 「上世に三武の君あり。邪惡下臣の請に徇うを以て銳意剪除すと雖も、既に廢して後、随つて愈々興る。」(北宋・張商英『護法論』)

資料 4 「夫れ大教の東流して自り四百余年、藩主居士の時に奉ずる者有りと雖も、真丹の宿訓上世に先行し、道運時に遷るも、俗は未だ僉悟らず。藻悦濤波するは下士のみ。唯だ肅祖明皇帝は實に天降の徳にして始めて斯道を欽び、手にて如来の容を画き、口に三昧の旨を味い、戒行は嚴隱より峻、玄祖は無生を暢べ、大塊既に唱え、萬竅怒号し、賢哲君子の宗に帰せざるはなし。日月遠しと雖も、光景彌々暉き、道業の隆なること今より盛なるは莫し。」(東晋・習鑿齒「与釈道安書」・『弘明集』卷12)

資料 5 「楚王、黄老の微言を誦し、浮屠の仁祠を尚ぶ。潔齋すること三月、神と誓いを為す。何ぞ嫌はん、何ぞ疑はん。悔吝あるべし。それ贖を還し、伊蒲塞、桑門の盛饌を助けしめよ」(『後漢書』伝卷32「楚王英伝」) ※楚王英(—71)は後漢明帝(57—75)の異母弟

資料 6 後漢の建和2年(148)に安世高は洛陽に至り、經典を翻訳。呉の赤烏10年(247)に康僧会是建康に至る。康僧会は孫権(222—52)を仏教に帰依させて建初寺を創建。

資料 7 「永嘉の乱」 西晋(265—316)末、永嘉年間(307—312)、漢民族以外の匈奴・氐・羌・鮮卑などの諸部族による乱。西晋の懷帝は、宗室以下数万人と共に殺され、宮殿は焼失し、陵墓は発掘され、都の洛陽は廢墟と化した(311)。ついで愍帝が長安に即位したが、匈奴の劉曜に殺された。西晋は滅亡し五胡十六国時代が始まる。晋は南に移り東晋となる。

資料 8 「曩には晋人略ぼ仏を奉ずること無し。沙門の徒衆は、皆是れ諸胡たりき。且つ王者は之と接せず。故に其の方俗に任せ、之が為に檢せざる可きのみ。今や主上は仏を奉じ、親しく法事に接す。事は昔に異なる。何ぞ其の礼をして準有らしめざる可けんや。」(東晋・桓玄「難王中令」、『弘明集』卷 12)

資料 9 「仏法は宏誕にして了する能わざる所なり。・・・今や事は既に己に在り」(東晋・桓玄「許沙門不致礼詔」『弘明集』卷 12)

資料 10 東晋の桓玄(369—404)と廬山の慧遠(334—416)との「礼教」と「沙汰」の問題。儒教の「礼教主義」は、政治を「礼」形式と「教」の倫理・教化で貫こうとする。慧遠の『沙門不敬王者論』は、沙門は「方外の賓」で礼教の外と主張する。「沙汰」は僧の淘汰。

資料 11 「仏の貴ぶ所は無為なり。慙懃にするは絶欲に在り。而るに比ごろ陵遲し、遂に斯の道を失う。京師に其の奢淫を競い、榮觀は朝市に粉す。天府は之を以て傾置し、名器は之が為に穢黒し、避役は百里に鍾り、逋逃は寺廟に盈つ。乃至一県に数千、猥りに屯落を成し、邑に遊食の群を聚め、境には不羈の衆を積む。其れ治を傷り政を害し、仏教を塵滓する所以にして、固に彼此俱に弊にして、実に風軌を汚す。・・・此に諸沙門在りて、能く經誥を伸述し、義理を暢説する者、或いは禁行修整し、戒を奉じ虧くること無く、常に阿鍊若を為す者、或いは山居して志を養い、流俗を営まざる者有らば、皆以て大化を宣寄するに足る。・・・所在に其の戸籍を領し、之がために制を嚴にし、速やかに下に之を申べ、並びに上に列せよ。唯だ廬山は道德の居る所、搜簡の例に在らざれ。」(東晋・桓玄「与僚属沙汰僧衆教」『弘明集』卷 12)

資料 12 「近頃、しきりに州から通達を受け、(沙門)の名籍を求められており、せっぱつまって甚だ厳しいものがあります。いまだ陛下の高旨がわかりません。野人は畏懼しやすく、甚だ深く憂慮するもので、(このため)遂に禅定の人は静心を失い、勤行の士は行業を廢し、精も氣も喪失してしまい、朝方まで眠れず、悲嘆にくれはてて、どのようにしてよいかわからぬありさまです。」京邑沙門等が龍安三年(399)に桓玄に宛てた書。(東晋・釈支遁「与桓大尉論州符求沙門名籍書」『弘明集』卷 12)

資料 13 「経教の聞く所、凡そ三科有り。一には禅思して微に入る、二は遺典を諷味し、三に福業を興建す。三科は誠に異なるも、皆律行を以て本と為す。」(東晋・慧遠「与桓大尉論料簡沙門書」、『弘明集』卷 12)

資料 14 北朝の崇仏皇帝 ○後趙の石勒(319—333)・石虎(334—349)と仏図澄(232—348)
○前秦の苻堅(357—385)と釈道安(312—385) ○後秦の姚興(393—416)と鳩摩羅什(344—413) ○北涼の沮渠蒙遜(401—433)と曇無讖(385—433)

資料 15 河西王の沮渠蒙遜は、承玄2年(429)に黄河を越えて乞伏暮末を攻撃したが、暮

末の軍に敗れ、皇太子の興国は殺害された。「蒙遜は大いに怒り、仏に仕えたところで何の応護もない（「事仏無応）」と考えて、ただちに沙門を追放処分とし、五十歳以下の者はすべて還俗させた。」（梁・慧皎『高僧伝』巻2「曇無讖伝」）

資料 16 「石勒は、仏図澄を召し出してたずねた。「仏道にはいかなる靈験があるのか」。仏図澄は石勒が深い道理に達せず、ただ道術でもって証明できるだけだと知り、それで「至高の道理は深遠であるが、卑近な事柄でもって証拠とすることができる」と言ったうえ、さっそく鉢を取って水を盛り、焼香して呪文を唱え、たちまちにして青い蓮華が生じ、目にもまばゆく光り輝いた。石勒はこれによって信服した。」（『高僧伝』巻9「仏図澄伝」）

資料 17 「仏図澄の仏道教化が行なわれると、民衆の多数が仏教を信奉し、皆そろって寺院を造営し、競って出家したが、本物とまがい物の僧とが入り混じり、しばしば罪過を生じた。石虎は文書を下して中書省に諮問した。「仏は世尊と号し、国家の信奉するところであるが、爵位官秩のない市井の民衆はそもそも仏に仕えてよいものかどうか。また沙門はすべて高潔で真正、立派に精進に励んでこそ、はじめて僧侶となるにふさわしい。ところが今、沙門の数ははなはだ多く、なかには邪悪で徭役逃れを目的とした者がおり、往々にしてふさわしくない人間がいる。詳しく議論するがよい」（『高僧伝』巻9「仏図澄伝」）

資料 18 「王度は次のように上奏した。……仏は西域に出自し、外国の神であって、その功德は民にはほどこされず、天子や中華の民が祭祀し信仰すべきでない。……中華と夷狄では制度を異にし、人も神も流れを別にするのである。外は内に同じからず、供物を捧げる祭祀は礼を異にし、化外の民と中華の服装祭祀はごっちゃにしてはならない。国家は趙の民すべて寺に出かけて焼香し礼拝することを許さないように禁制し、典礼を遵守させるがよい。諸侯や官僚から降って下々の者に至るまで、すべて一律に禁止する。」（「仏図澄伝」）

資料 19 「俗教（儒教）を詳検するに並びに五経を憲章とす。尊ぶ所は唯だ天のみ、法る所は唯だ聖のみ。……一には「経説は迂誕、大にして微なし」と疑う。二には「人死して神滅し、三世あること無し」と疑う。三には「真仏を見ること莫く、国治に益無し」と疑う。四には「古には法教無く、近く漢世に出ずる」と疑う。五には「教は戎方に在り、化は華俗に非ず」と疑う。六には「漢魏は法微、晋代に始めて盛んなる」と疑う。此の六疑を以て信心樹たたず。」（梁・僧祐（445—518）『弘明集』後序「弘明論」）

資料 20 「世俗で仏教を非難する理由は、大体次の五つに分類できるだろう。第一は仏教がこの世界の外のことを語り、またその説法が余りに神変不可思議極まることを述べるので、でたらめを言っていると見られるのである。第二は仏教の説く吉凶禍福の因果応報が直ちには現れないので、ペテンであるとされることである。第三は僧尼の修行が粗雑で純粹さに欠けた者が多いので、人にかくれて悪事をはたらく連中だとされることである。第四は金銀財宝をぜいたくに使って、租税や力役（義務労働）を減らすから国家のためには損害であると言われる点である。第五は仮りに因縁というものがあり、従って応報あるのだとしても、どうして今日辛苦修善するこの甲の身が、後世のあの乙を利益することがで

きるのか、つまり[現世と来世では、]当人が全然個別の人格ではないかという疑問があるのだ。」

(顔之推(531—591)『顔氏家訓』「帰心篇」宇都宮清吉訳(「中国古典文学大系」9))

資料 21 「教に必ず漸有るは、神化の常なり。感応は時に因り、縁に非んば如何せん。故に儒術は秦を愚とし漢を智とするには非ず。用と不用とのみ。仏信は漢に浅くして晋に深きに非ず。明と不明とのみ。故に知る五経は恒に善にして、而も崇替は運に随うと。仏化は常に熾にして通塞は縁に在り。一以て此を思えば深惑無かる可し。而も疑いに執して悟ること莫し。痛悼と為すべき者の六なり。夫れ信順は福の基にして、迷謗は禍の門なり。而も矇矓の徒は、多く力を量らず。己の知らざる所を以て而も先覚の偏知を誣る。其の見ざる所を以て而も至人の明見を罔にす。三世に鑒達するを反って邪僻と号す。専ら目前に拘泥して自らを明智と謂う。」(梁・僧祐『弘明集』後序「弘明論」)

資料 22 「これらの疑問について明答を求めても、結局了解に達する返答は誰からも期待できない。否、そもそも人間世界の高々常識的にしか過ぎない尺度で、宇宙外をあれこれ臆断する方が、どうかしているといえないだろうか」(顔之推『顔氏家訓』「帰心篇」)

資料 23 「仏教信仰の道は幾つもあり、出家の道は自らその一つに過ぎないのである。もし厚い孝心を胸にいだき、仁恵の精神(世俗の倫理)を根本としてゆく自信があるならば、(出家しない信者)須達や流水の例もある如く、必ずしも頭を円め鬚をそり、出家の形を取るだけが信仰ではない。・・・一体、出家生活に入ることは、個人の問題である。費用節約は国家の問題である。個人と国家は両立しがたいところがある。」(『顔氏家訓』「帰心篇」)

資料 24 「四時のみたま祭の礼は、周公・孔子さまのみ教えで、その御本旨は親の魂魄は永生せしむべく、孝道は忘れてはいけないというにある。仏教の経典が教えるところにしたって、それ以上のことをいっているわけではない。敢えて殺生してまで、そうした祭祀にささげれば、かえって罪業を深めることにもなる。・・・四時の祭祀より時々施餓鬼をしてくれること、七月十五日の盂蘭盆をしてくれることの方を希望する。」(『顔氏家訓』「終制篇」)